

書評01

ミリアム グラックスマン 著 木本 喜美子 翻訳

『「労働」の社会分析 ～時間・空間・ジェンダー～』

法政大学出版局／2014年2月刊／301ページ／3,400円＋税
ISBN 978-4-58-867517-7

評者：竹信 三恵子
和光大学現代人間学部教授



「<働く>の全体像をつかむ道具」の必要性

「労働」という言葉に違和感を持つ女性は少なくない。「労働って、ちゃんとした会社で働く正社員のことでしょ」というしらけた声も聞く。だが、パートなどの非正規労働、育児や介護を含めた家事労働と言った「見えない労働」を視野に入れると、その担ってきた労働の多様さと膨大さは驚くほどだ。そしていま、少子化や男性雇用の不安定化の中での「女性が輝く社会」のかけ声の下、女性の労働への期待はいや増している。そんな空気の中、「見えない労働」が見えないまま放置され続ければ、女性たちの負担は極限にまで達しかねない。本書は、こうした「見えない労働」も視野に入れた<働く>の全体像をつかみ取ろうとした貴重な試みだ。

<働く>の全体をつかむための道具の整備がいかに大切かを知るためには、まず、私たちの現状を知る必要がある。

日本の働く女性のうちパートや派遣、契約社員といった非正規の女性の比率は、今や6割近くに達した。これらの働き方は最低賃金すれすれの安さだ。背景には、「パートは夫に食べさせてもらって家事を引き受ける女性の片手間仕事」「だからお小遣い程度でかまわない」という社会意識がある。女性の間で非正規労働がこれほど増えた背景にあるのも、家事労働だ。1985年に制定された男女雇用機会均等法は、女性保護の撤廃と引換えに生まれた。男性正社員たちは、家庭の主婦の無償労働に支えられ「家

族を養うため」に無制限に近い残業を許容してきた。こうした働き方に、女性たちは家事労働を抱えたまま投げ込まれることになった。

当然、多くの女性はその重さに耐えきれず、正社員からこぼれ落ちて非正規市場へと流れ込む。非正規雇用の安さと契約打ち切りの容易さから、若者をはじめとする男性も非正規雇用へと巻き込まれ、ついに働き手の4割近くが非正規、という雇用劣化社会が生まれた。

同一労働同一賃金の仕組みがなく、低賃金の非正規が正規労働者と同様の仕事を担う状況の中では、正規の賃金も引き下げられ、ブラック企業が闊歩し始める。こうした文脈の中で、生協やワーカーズコレクティブは「生活と調和した働き方」を取り戻す活路として再度脚光を浴び始めている。

このように「労働」は、家事労働などの多様な生活関連労働を伴い、賃金労働者対資本家という構図だけではなく、男女、民族などのさまざまな社会的な要素が複雑にからまりあって成り立っている。だからこそ、既成の「労働」の枠を超えた労働の全体像をつかむための道具の整備は、一段と重要となる。本書は、そのような「労働をめぐる前社会的な組織化」という枠組へ向け、英国北西部、マンチェスター近辺の労働者階級の女性たちの聞き取り調査を展開する。第二次大戦後のような家事省力化がなかった第一次・第二次大戦間の「戦間期」に、労働者階級の女性たちはどのように働いてきたか、

家事労働にどのように向き合ってきたのか。これらについての女性たちの回想は、いくつもの興味深い事実を浮かび上がらせる。

たとえば、同じ「働く女性」でも、熟練が必要な紡績工場の「職工」のフルタイム女性たちと、「臨時雇い」のパートタイム女性たちは大きく異なっている。「職工」の女性たちは、自らのアイデンティティを工場での仕事に置き、家庭での無償の労働については、たとえ自分が担っていても、どうでもいいものと受け止める。一方、「臨時雇い」の女性たちは、自分の稼ぎ出す賃金が夫の不安定雇用による低収入を補って家計の柱となっても、主要な関心は主婦としての家事の腕前や達成度だ。

こうした違いは労働時間意識にも表れる。「職工」女性たちは、労働時間と終業後の家庭での時間を明確に線引きする。一方、「臨時雇い」の女性たちは、パート労働、フルタイム女性が購入する有償家事サービスの提供、自分の家庭内労働を併せて担う。これらの時間は複合的で「商品化された時間が商品化されていない時間に埋め込まれ」てしまっているため、時間の線引きはあいまいになると本書は指摘する。ライフスタイルの上で、「職工」女性は結婚や出産を大きな節目とは考えず、自身の労働者人生の開始と終了こそが節目だ。一方、「臨時雇い」の女性にとって結婚や出産は、人生を変えて行く大きな節目だ。

こうした指摘は、現代のフルタイムとパートタイム女性の違いを説明するうえでも有効だ。労働時間でなく成果で賃金を決める「残業代ゼロ労働制度」が話題になっているが、一日8時間労働の規制の撤廃につながりかねないこのような制度は、働く女性の家事・育児時間の確保を困難にし、両立の大きな壁になる恐れがある。にもかかわらず、女性の間でこの議論がさほど盛り上がらないのは、日本の働く女性の多くが、本書の指摘する「商品化された時間が商品化されていない時間に埋め込まれ」た非正規労働者

の時間意識であるためかもしれない。となれば「残業代ゼロ労働」の問題を広く女性たちに理解してもらうには、その時間概念に沿った別の説明が必要になってくる。

また、「空間」からみた女性労働者の分析も興味深い。ここでは、ロンドンのような新しい産業が発展し有償労働の選択肢が豊富な地域と、調査対象となった地域のような長期にわたって織物産業が支配的だった地域とで、女性労働者の意識やライフスタイルが異なってくることを指摘している。

有償労働の選択肢が豊富な地域は、希望するライフスタイルに沿った有償労働を選択できるため、ライフスタイルの多様化が起きやすく、伝統的な男女分業型の働き方は崩れやすい。一方、単一の伝統産業支配が続いた地域は、住民が地域の伝統に疑いをもちにくく、特に女性にとっては多様な生き方など不可能で、選択肢は臨時雇いに限られてしまう。そのような環境でジェンダー間分業が崩れる余地は少ない。

性別役割分業の根強さは、企業の無理解や女性の「意識の低さ」など、原因が単純化されがちだ。だが本書の「空間」の概念から見直すと、女性たちに提供される有償労働の選択肢や地域の産業構造なども大きくかわってくるが見えてくる。「女性が輝く社会」政策に必要なのは、男女や企業への意識啓発や、企業を活躍しやすくするための規制緩和より、むしろ、女性が経済的に自立できるような多様な職業の選択肢を提供する産業政策や福祉政策なのかもしれない。

狭い「労働」の枠を超え、働く女性の実態に即した＜働く＞のすべてを包括した分析方法を磨き上げていく必要性を、痛感させてくれる一冊だ。